

要 旨

特別活動では、望ましい人間関係を形成していく実践的態度の育成が求められている。そこで、本研究では、学級や学校生活における問題を自分たちで解決していけるように、話合いや振り返りにおいて交流活動を仕組んだ。その結果、よりよい自己決定ができ、自己肯定感が得られ、意欲を高めながら問題解決へ向けて取り組むようになった。さらに、実践後に自分自身と集団の変容を見取るシートを活用することで、個が高まれば集団も高まることを実感し、所属感を得ることができた。これにより、生活における問題を自分たちで解決する自信もち、生活をよりよくしようという意欲が育ってきた。

<キーワード> ①交流活動 ②よりよい自己決定 ③自己肯定感 ④所属感

1 研究の目標

集団の一員として、生活をよりよくしようとする児童を育成するために、学級活動「(2) 日常の生活や学習への適応及び健康安全」において、自己決定力を育てる指導の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

近年、人と人との関わり合う体験の不足が指摘され、望ましい人間関係を築く力の低下が、豊かな人間性の発達に大きな影響を与えていると言われている。そのため、よりよい人間関係を形成していくことが重要視されるようになり、小学校学習指導要領では、特別活動の各活動・学校行事の全てにおいて、望ましい人間関係を形成していく実践的態度の育成が求められるようになった。

特別活動における学級活動「(2) 日常の生活や学習への適応及び健康安全」は、児童に共通する課題を取り上げ、集団で解決方法を考える。それを基にして、個々人による解決方法の自己決定、粘り強い実践、振り返り活動を展開していく。そして、これらの活動をスパイラル状に繰り返すことにより、課題解決に向かう取組が継続され、習慣化していくものである。この活動の中で、①課題意識をもって、友達の思いや考えを聞きながら解決方法について話し合い、一人一人が目標とすることを見定め自己決定すること、②互いの思いを理解し合い共感的な人間関係をつくること、③互いの頑張りを認め合ったり、励まし合ったりすることで、自己肯定感や所属感を得ること、これらを大切にしながら指導していくことこそ、よりよい人間関係の形成につながるものだと考える。

そこで、本研究では研究テーマ、研究課題を受け、学級活動(2)において、自己決定力を育てる指導の在り方を探りたいと考えた。ここでいう自己決定力とは、児童が直面した課題に、どのように対応すべきか考えを見定め、自らの意志と責任で決定し実行する力と捉える。その自己決定力を基に、課題解決のための目標に向かって、互いに励まし合い、頑張りを認め合いながら実践していくことで、集団への所属意識をもち、生活の向上を目指す児童が育つと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

学級活動(2)の話合いや振り返りにおいて、思いや考えを伝え合う交流活動を仕組めば、よりよい自己決定ができ、一連の活動を通して自己肯定感や学級への所属感を得ることで、生活における課題解決と向上へ向けて自主的に努力する意欲や態度が育つだろう。

4 研究方法

- (1) 文献や研究紀要等などを通じた、話合い活動の指導法や評価に関する理論研究
- (2) 課題提示につながる学級集団アンケートの調査項目に関する研究

(3) 話し合い活動の授業を行い、よりよい自己決定力を付けさせる手立ての検証及び考察

5 研究内容

- (1) 学級活動「(2) 日常の生活や学習への適応及び健康安全」の指導法や評価に関する研究を基に、理論研究を行う。
- (2) 学級集団や題材に関するアンケートによる実態調査や観察を行ってその結果を分析し、事前の活動における課題提示の方法を明らかにする。
- (3) 所属校5年生において、「相手を思いやる言葉のつかい方」(3時間)「6年生を目前にして」(3時間)を題材とした学級活動(2)の授業を行うことで、仮説を検証し、手立ての有効性を確かめる。

6 研究の実際

(1) 文献等による理論研究

片岡が、「有効な集団思考によって、より豊かな集団的創造あるいは集団的問題解決が生まれる」¹⁾と述べていることから、集団で話し合いをすることによって、多様な考えが出され、集団としての問題解決ができると捉えた。中川は「日常の教育活動全体の中で、『自己決定』の体験を多く与えることが、主体性を育て、自ら考え、正しく判断、決定し、行動、実践する子供の育成につながるものである」²⁾と述べている。杉田は、「特別活動においては、児童に活動への自信をもたせたり、意欲を高めたりすることが大切であることから、よさや努力を認め合わせるようにすることが大切」³⁾「よりよい生活づくりに、教師の適切な指導のもとで、真剣に取り組ませることができれば、子どもたちはその過程で、我慢や努力、正義や規律、協力や思いやり、役割や責任などを学ぶことができる。そして、所属感を味わい、自分への自信を高め、さまざまなことに積極的に挑戦するようになる」⁴⁾と述べている。また、國分は、「自己肯定感とは、自分自身のもっている良い面を認め、更に伸ばしていこうとする感情である」⁵⁾と述べ、紺野は、「子どもは、目標達成に向かって努力をして一定の成果を得ることができれば、満足感や自己肯定感を得る」⁶⁾と述べている。そこで、自己肯定感が得られるというのは、努力の結果「できた」と感じることで自分のよさに気づき自信をもつことと捉えた。

これらのことから、生活上の問題については、話し合いを通して努力目標を自己決定し、その後、実践や振り返りにおいて、よさや努力を認め合わせることで、自己肯定感や所属感が得られ、集団の一員として生活をよりよくしようとする意欲や態度の育成につながると考える。

(2) 研究の構想

学校生活の問題に対して実態把握し、課題意識をもたせるために、題材に関するアンケートと学級集団アンケートを行う。学級集団アンケートでは、①目標をやりとげる②話をつなげる③支え合う④認め合う⑤決まりを守るの5項目について、学級の状態を見取ることとする。そして、実態を視覚的に把握させるために、アンケートの結果を一人ずつグラフにし、実践後での児童の変容を見取るためのシート(「ステップアップシート」とする)を活用する。その後、児童の進行による話し合いにおいて、学級全体で原因追及、必要性、解決方法について出された意見を参考にしながら、課題解決につながるめあてを自己決定する。そして、グループタイムを設定し、それぞれが決めためあてに対して、アドバイス、賞賛、励ましをし合い、自分の課題に合った、かつ、具体的なめあ

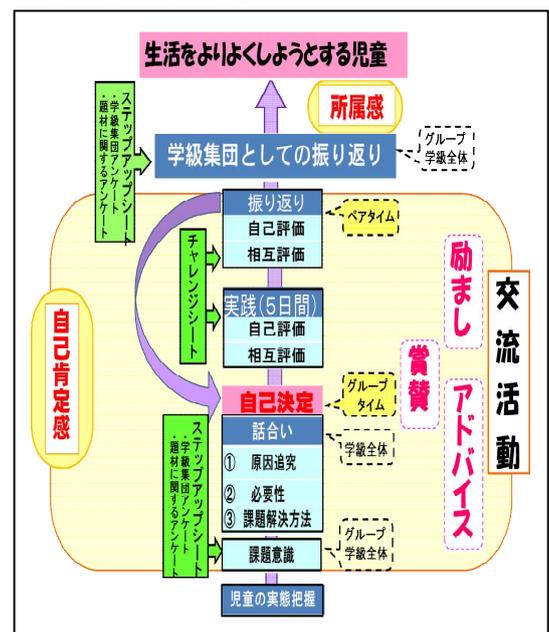


図1 研究の構想

てを自己決定させる。その後、自己決定しためあての達成へ向けて実践する。実践は、前半後半の5日間で、毎日、自己評価と相互評価を行う取組シート(「チャレンジシート」とする)を活用する。5日間の実践後、振り返りにおいてペアタイムを設定し、チャレンジシートを基にアドバイス、賞賛、励ましをし合うことで、自分の頑張りを実感させる。10日間の実践後、事前にとった2つのアンケートを再びとる。その結果を載せたステップアップシートを基にグループや学級全体での振り返りを行う。この活動を通して、めあてに向かって努力することで自分自身の生活が向上し、同時に、学級集団力の伸びにつながることを実感させる。学級集団力とは、学級集団アンケートで把握した5つについての力とする(前頁図1)。

このように、話し合いから振り返りまでの交流活動において、アドバイス、賞賛、励ましをし合うことで、よさや努力を認め合わせ、自己肯定感を味わわせる。さらに、学級集団力の伸びを確認する振り返りを行うことで、所属感を味わわせ、生活をよりよくしようとする児童が育つと考えた。

(3) 検証の視点と具体的な手立て

ア 【検証の視点Ⅰ】話し合い活動における、学級全体、グループでの交流活動によって、よりよい自己決定ができたか。

「よりよい自己決定」とは、事前調査アンケートによって明らかとなった自分の課題に対して、その課題の解決方法となるめあてを決定していること、解決方法として、何を、誰に対して、どのように取り組むのか、取り組む姿がイメージできる具体的なめあてを決定していることとする。よりよい自己決定をすることで、具体的なアドバイスや賞賛をし合うことができ、実践意欲や態度の育成につながると思う。

1時目では、話し合いにおいて前半の実践へ向けためあての自己決定を行った。

児童の考えを広げたり、深めたりするため、まず、児童の進行による学級全体での話し合いを行い、柱1で原因追及、柱2で解決の必要性、柱3で解決方法について意見を出し合わせた(資料1)。そして、友達の意見を参考にして、自分の課題に合った解決方法となるめあてを自己決定させた。次に、10分間のグループタイムを設定し、自分の課題に対する解決方法となるめあてなのかを確認し、実践へ向けてより具体的なめあてにするため、それぞれのめあてに対して互いにアドバイスさせた。その際、アドバイスされたことは、赤で書き加えることにした。その後、アドバイスを基に自分のめあてを見直し、最終の自己決定を行った。そして、グループ内で発表し合い、めあてを自己決定できたことを互いに褒め合い、最後に、実践へ向けてのやる気をもたせるために励まし合った(資料2)。後半のめあてについては、前半の実践後の振り返りで明らかになった課題を基に自己決定し、前半同様、グループタイムを行った。

イ 【検証の視点Ⅱ】チャレンジシートを活用した振り返りの交流活動によって、課題解決へ向けて自主的に努力する態度が育ったか。

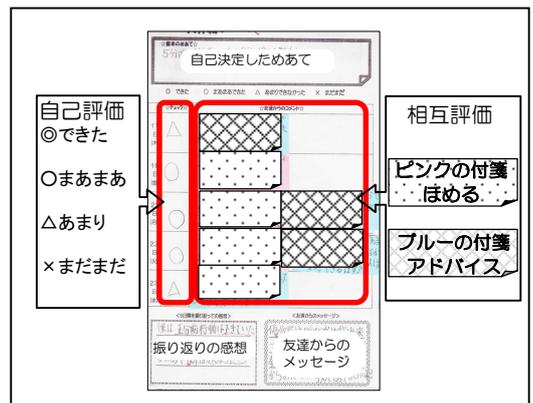
実践は前半後半各5日間とし、チャレンジシートに、

話し合いの流れ		時
1 話し合いの柱	2 話し合いの柱	3 話し合いの柱
柱1 こつこつめが手本となるに不足なのかな。 原因追及	柱2 なぜ、下宿生の手本となる必要があるのかな。 必要性	柱3 下宿生の手本となるには、どうしたらいいかな。 解決方法
話し合いの順序		4 話し合い
話し合いの柱		5
自分の課題		5分
自分の意見・理由		7分
自分の課題に対する解決方法		10分
話し合いでの意見を参考に、めあて(解決方法)を書き加え、自分のめあてとする。		10分
話し合いの振り返り		8
グループタイム 10分		6 友達の意見
友達からのアドバイスは、赤で書き加えよう。		7 先生の話し
		8 終わりの言葉

資料1 話し合いの流れ

- よりよくしよう！グループタイムの流れ**
- ① アドバイス…具体的なめあてになっているのか、意見を出し合おう。
 - ② めあての決定…アドバイスを参考に、めあての最終決定をする。
 - ③ めあての発表…場面をイメージしながら伝えよう。
 - ④ ほめる…自己決定できたことを互いにほめ合おう。
 - ⑤ 励まし…実践へ向けてやる気をもたせよう。

資料2 グループタイムの進め方



資料3 チャレンジシート

毎日の自己評価とペアによる相互評価を行うようにした。自己評価は◎(できた), ○(まあまあできた), △(あまりできなかった), ×(まだまだ)の4段階で行い, 相互評価は付箋を使ってコメントを書き合った。頑張りを認めたり, 褒めたりするときにはピンクの付箋, アドバイスはブルーの付箋に書くようにした(前頁資料3)。その際, できるだけ客観的な評価になるように, 友達の自己評価に左右されずに書くことと, どんな姿がよかったのか, どのようにすればよいのかなど, できるだけ具体的なコメントを書くように伝えた。そして, チャレンジシートに貼られた付箋を基に, 7分間のペアタイムを行い, 実践の振り返りを行った。まず, ピンクの付箋を見直しながらかんぱりを伝え合い褒め合った。次に, ブルーの付箋を見直しながらか, これからの実践へ向けて, もっと頑張れそうなことをアドバイスし合い, 最後に, 励ましのメッセージを書き合った(資料4)。

よりよくしよう! ペアタイムの流れ

- ① 頑張っていたこと(ほめる)・・・
友達の頑張りを伝え合おう。
(ピンクの付箋を見直す)
- ② もっと頑張れそうなこと(アドバイス)・・・
友達がもっと頑張れそうなことを伝え合おう。(ブルーの付箋を見直す)
- ③ <友達からのメッセージ>を書こう・・・
友達を励まそう。

資料4 ペアタイムの進め方

ウ 【検証の視点Ⅲ】ステップアップシートを活用した振り返りの交流活動によって, 生活の向上に向けて自主的に努力する意欲が育ったか。

変容を見取るために, 事前の実態把握時と10日間の実践後に題材に関するアンケートと学級集団アンケートを取った(資料5, 6)。どちらのアンケートも, とても思う, まあまあ思う, あまり思わない, 全く思わないの4段階で回答させた。題材に関するアンケートは, 自己評価の項目について, 一人ずつの結果と学級全体の結果をグラフにした。

学校生活アンケート ()

1 掃除の時間について振り返ろう。
①掃除の態度として, どのような姿が, 下級生にとって手本になると思いますか?
4: とても思う 3: まあまあ思う 2: あまり思わない 1: 全く思わない

②あなたの掃除の態度は, 下級生にとって手本になっていると思いますか?
4: とても思う 3: まあまあ思う 2: あまり思わない 1: 全く思わない

③④のように答えた理由を書きましょう。

2 挨拶について振り返ろう。
①挨拶の仕方として, どのような姿が, 下級生にとって手本になると思いますか?
4: とても思う 3: まあまあ思う 2: あまり思わない 1: 全く思わない

②あなたの挨拶の仕方は, 下級生にとって手本になっていると思いますか?
4: とても思う 3: まあまあ思う 2: あまり思わない 1: 全く思わない

③④のように答えた理由を書きましょう。

3 廊下の歩き方について振り返ろう。
①廊下の歩き方として, どのような姿が, 下級生にとって手本になると思いますか?
4: とても思う 3: まあまあ思う 2: あまり思わない 1: 全く思わない

②あなたの廊下の歩き方は, 下級生にとって手本になっていると思いますか?
4: とても思う 3: まあまあ思う 2: あまり思わない 1: 全く思わない

③④のように答えた理由を書きましょう。

4 時間の守り方について振り返ろう。
①時間の守り方として, どのような姿が, 下級生にとって手本になると思いますか?
4: とても思う 3: まあまあ思う 2: あまり思わない 1: 全く思わない

②あなたの時間の守り方は, 下級生にとって手本になっていると思いますか?
4: とても思う 3: まあまあ思う 2: あまり思わない 1: 全く思わない

③④のように答えた理由を書きましょう。

資料5 題材に関するアンケート

学級集団アンケート

1: とても思う 2: まあまあ思う 3: あまり思わない 4: 全く思わない

目標をやりとげる

① 達成したい目標がある学級だ。	1	2	3	4
② 自分たちの学習や生活をよくするための話し合いや活動をしている学級だ。	1	2	3	4
③ 友達のためになることをしようとする学級だ。	1	2	3	4

話をつなげる

① 発表している人の話を最後までしっかりと聞いている学級だ。	1	2	3	4
② 友達の考えのよい所を生かそうとする学級だ。	1	2	3	4
③ 話し合いの時, 考えや意見を進んで出し合う学級だ。	1	2	3	4

支え合う

① 困っている人がいたら, 教え合いや助け合いをしている学級だ。	1	2	3	4
② 素直に「ごめんね」と言って, 仲直りができる学級だ。	1	2	3	4
③ 「ありがとう」がすぐに言える学級だ。	1	2	3	4

認め合う

① 何でも話せる雰囲気がある学級だ。	1	2	3	4
② 友達のよい所や頑張っている所を伝え合っている学級だ。	1	2	3	4
③ 誰でも遊んだり, グループになったりすることができている学級だ。	1	2	3	4

決まりを守る

① 学習の約束を守って, 一生懸命に学習する学級だ。	1	2	3	4
② 学校のままりを守って生活する学級だ。	1	2	3	4
③ みんなで決めた学級のルールを守る学級だ。	1	2	3	4

資料6 学級集団アンケート

学級集団アンケートは, 「目標をやりとげる」「話をつなげる」「支え合う」「認め合う」「決まりを守る」の5つの評価項目ごとに3つの質問を行い, 学級全員の回答を点数化して, 結果をレーダーチャートにした。そして, それぞれをグラフにしたステップアップシートを活用して, 振り返りを行った(資料7)。10日間の実践後, まず, 自分自身の変容を確かめ, 学級全体の事前事後のアンケート結果の変容に対する気付きとその理由についてグループで話し合わせた後, 学級全体で意見を交流し合った。

30-STEP UP シート

Chance! チェンス
Challenge!!
Change!!

学級集団アンケート結果

題材に関するアンケート結果

グラフを見た感想

資料7 ステップアップシート

(4) 児童の実態

学校生活の中で気になることがあると, めあてを立て, チェック表を活用し, 自己評価をしながら課題解決へ向けて取り組ませてきた。しかし, めあてが抽象的だったため, 曖昧な判断で自己評価をしていて, めあてに対する変容に気付きにくかった。しかも, 実践意欲がなく, 仕方なく取り組んで

いた。そこで、生活上の問題に対して取り組む自分の姿がイメージできるような具体的なめあてを自己決定すること、振り返りが自主的にできるように工夫することで、教師による声掛けで一時的に改善するという受け身的なものではなく、自分の中にしっかりとした判断基準をもって、自主的に解決しようと努力する意欲や態度を育てる必要があると考えた。

(5) 手立ての実際と考察

ア 仮説を検証するために、所属校第5学年(28名)において検証授業を行った(表1)。

表1 検証授業の概要

11月実施		ウ 望ましい人間関係の形成
題材	「相手を思いやる言葉のつかい方」～スペシャリストへの道～	
ねらい	「言葉のもつ力」について理解し、「相手を思いやった言葉のつかい方」の実践をしようと、互いに励まし合いながら努力することで、誰もが安心して過ごせる楽しい学級生活にしようとする意欲や態度を育てる。	
1月実施		ア 希望や目標をもって生きる態度の形成
題材	「6年生を目前に」～目指す6年生像に近付き隊 大作戦!～	
ねらい	下級生の手本となることの必要性について考え、自分自身の生活における課題解決へ向けて、互いの頑張りを認め、励まし合いながら努力することで、「目指す6年生像」に近付こうとする意欲や態度を育てる。	

ここからは、主に1月に実施した授業についての詳細を述べる。

イ 【視点I】話合いにおける、学級全体、グループでの交流活動によって、よりよい自己決定ができたか。

抽出児童と学級全体の自己決定内容の変容を基に考察を行う。

(ア) N児は、10月に行った意識調査アンケートにおいて、「学校生活における問題は自分たちで解決できるとあまり思わない」「学校生活における問題は自分たちで解決していこうと全く思わない」と回答した児童である。

事前指導において、N児は、学校生活(時間の守り方、廊下の歩き方、挨拶の仕方、掃除の仕方)を振り返るアンケート結果のグラフを見て、時間の守り方で下級生の手本になっていないことを課題とした。

1時目に、学級全体での話合いとめあての自己決定を行った。学級全体での話合い前の原案には、「時間を意識する」と抽象的なめあてを書いていた。しかし、学級全体での話合い後は、友達が出した意見を取り入れて「5分前行動をする」と具体的になった。このめあてを基に、グループタイムを行った。グループ編成は、課題ごとに分けて、時間を守り隊、廊下を静かに歩き隊、挨拶を気持ちよくし隊、掃除を無言でし隊と名付け、その中で、人間関係を考慮して3～6名の6グループとした。そして、メンバーそれぞれのめあてが、取り組む姿のイメージができる具体的なものなのかを互いに確かめ合いながら、アドバイスをを行った。その結果、「みんなに優しく教える」というめあてが加わり、「5分前行動をして、みんなに優しく教える」と自己決定した。前半の実践で、めあての中の「5分前行動」に対して、5分前行動はできていたが、友達から言われて時間に気づき行動したこと、「みんなに優しく教える」に対して、周りへの呼び掛けができていなかったことが課題となって、後半のめあてを考えた。そして、その後のグループタイムによって、「自分から」を加えることをアドバイスされて書き加

表2 N児の自己決定内容の変化

		自己決定の内容	
1 時 目	手本になつていない(前半の課題)時間を守り方で下級生の手本になつていない	学級全体での話合い前	・時間を意識する。 課題に合っている。 抽象的。
		学級全体での話合い後	・5分前行動をする。 具体的
2 時 目	周りに人への呼びかけができていない(後半の課題)友達から教えてもらった行動した	グループタイム後	・5分前行動をして、みんなに優しく教える。 めあてが加わる
		グループタイム前	・5分前行動をし、みんなができていなかったら、放っておかないで、優しく教える。 場面を想定
		グループタイム後	・自分から5分前行動をし、みんなができていなかったら、すぐに教えてあげる。下級生には、特に優しく教える。 めあてが加わる 目指す6年生像を意識している。

えた。また、「下級生には特に優しく」と下級生の手本となることの必要性を意識したためあても加えられた(前頁表2)。

(イ) 学級全体における考察

学級全体の自己決定内容も、学級全体での話し合いで出された意見を参考にし、自分の課題に合っためあてや、具体的なめあてに修正していた。また、グループタイムによるアドバイスを基に、めあての内容が加わりながら、より具体的なめあてを自己決定できた。前半の実践で、めあてを十分に達成できた児童は、毎日の掃除の様子を学級全員で振り返ること、ホールをサイレントゾーンと名付けて下級生にも声を掛けること、朝、玄関前で挨拶運動をすることなど、学級全体や全校への働きかけをイメージしためあてを自己決定していた(資料8)。学級全体において、自己決定内容の変化を見ていくと、学級全体での話し合い前では、めあてが課題に合っていない児童が16%(4名)、抽象的な児童67%(19名)いたが、話し合い後は、課題に合っていない児童はいなくなり、抽象的な児童が60%(17名)になった。そして、グループタイム後は、89%(25名)が、取り組む姿がイメージできる具体的なめあてを自己決定できた。後半のグループタイム後には、課題に合って具体的なめあてを自己決定した96%(27名)のうち57%(15名)の児童は、めあての付け加えをして更に具体的なめあてを自己決定していた(図2)。

- ・しゃべらず静かに掃除をして、㊦㊧㊨のめあてをみんなに呼びかけて確認する。
- ・サイレントゾーンを作り、下級生の手本になるように広がらず静かに歩く。走っている人には「歩こうね」と教える。
- ・授業の号令で小さい声だったらやり直しをする。そして、挨拶運動では、笑顔で、気持ちのよい挨拶をする。

資料8 自己決定内容

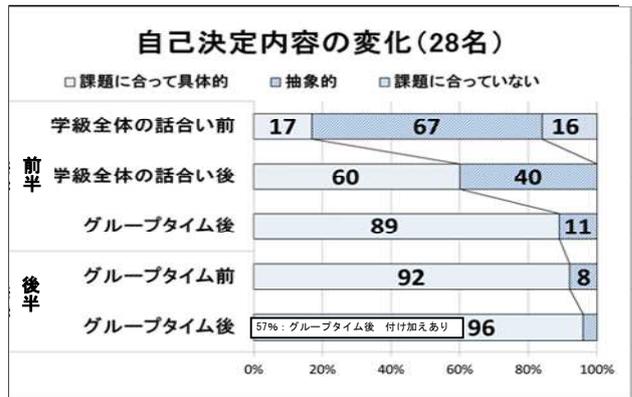


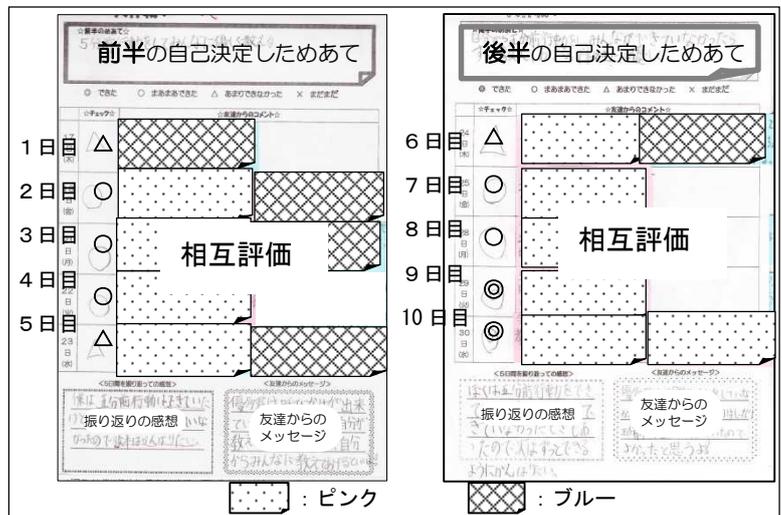
図2 自己決定内容の変化

ウ 【視点Ⅱ】 チャレンジシート(実践中に自己評価、相互評価をするシート)を活用した振り返りの交流活動によって、課題解決へ向けて自主的に努力する態度が育ったか。

チャレンジシートの自己評価と相互評価、感想の記述を基に考察を行う。

(ア) 抽出児童における考察

N児の前半5日間の自己評価では、1日目と5日目は「あまりできなかった」の自己評価で、ペアからの付箋による評価でも、ブルーの付箋に「5分前の呼びかけがあったら、すぐに戻ってくると言っていたけど、すぐに戻ってこなかったね。明日は、ちゃんと戻ってきてね」と書かれていた。このことから、1日目は、自覚ができていなかったことが分かる。2、3日目は「まあまあできた」としているが、相互評価でブルーの付箋に、みんなに教えることができていないことが書かれ、自己評価とのずれが見られた。しかし、4日目以降は、自己評価と相互評価とが一致してきたことが分かる(資料9)。



資料9 N児のチャレンジシート

10日間の自己評価の変容を見ると

少しずつ評価が高くなっていることから、少しずつ、実践態度が育っていることが分かる（図3）。

2時目に行った前半5日間の実践を振り返るペアタイムでの、友達からのN児に対する励ましのメッセージには、5日の実践でできていなかったことを的確に伝えるとともに、これから気を付けることが書かれていた（資料10）。その後のN児の感想には、後半の実践へ向けて「またがんばりたい」という意欲の高まりがうかがえたが、6日目の自己評価は「あまりできなかった」となっている（資料11、図3）。しかし、6日目の相互評価では、ピンクの付箋に「朝の時間、教室にもどる時、下級生にも声を掛けていたのでよかったです」と書かれ、2時間目の休み時間終了2分前に校内放送で呼びかけをしていることから、めあてを意識した実践をしていることが分かる。前半は、自己評価の「まあまあできた」に対して、ブルーの付箋でコメントが書かれている日が2日あったことと比較すると、自己評価の判断基準が高まってきたことも感じられる。

君は、5日前行動がちょっとずつ出来てきているね
あとは呼びかけが出来ていなかったの自分から
みんなに声かけていこう。君は出来ると思うよ

資料10 N児に対するメッセージ

君が「これはこんな風に出来ていた。」
や、アドバイスの時も、「こんな風にすればもっと
良くなるなどを言ってくれたからまたがんばりたい。

資料11 N児のペアタイム後の感想



図3 N児の自己評価の変容

(イ) 学級全体における考察

チャレンジシートの自己評価の変容では、6、7日目は「できた」が40%未満であるが、これは、評価の基準が上がったことを意味する。それは、相互評価によるピンクの付箋の数は両日とも60%を超え、前半5日間のピンクの付箋の数の平均56%より高いことから、実践態度が育っていることが分かるからである。7日目以降は自己評価で、「まだまだ」がなく、日を追うごとに「できた」「まあまあできた」の評価が増えている（図4）。また、ピンクの付箋の数も全体的に増えていることから、実践態度が育っていることが分かる（図5）。

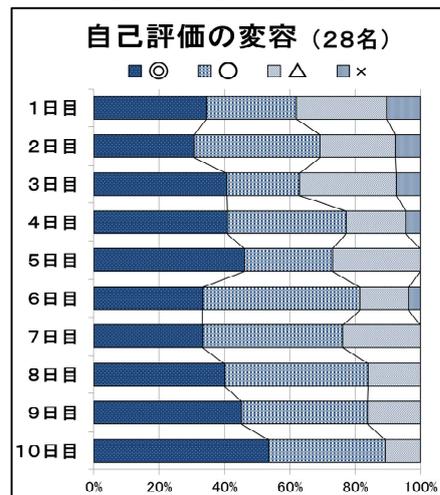


図4 学級全体の自己評価の変容

後半の実践では、学級全体や全校への働き掛けを行っていった。そして、掃除を静かにし隊は、掃除のめあてを「㊟そばの人がしゃべったら注意をする。㊟うるさくしない。㊟時間内に終わらせる」と立てて学級に呼び掛け、帰りの会で守れた人数を確かめて表に記入し掲示することで、学級全体の意識を高める働き掛けを行った。また、廊下を静かに歩き隊では、玄関ホールをサイレントゾーンと名付け、ポスターを貼って、下級生に声を掛け、挨拶を気持ちよくし隊は、朝、児童玄関前で挨拶運動をする姿が見られた。



図5 学級全体の相互評価の変容

エ 【検証の視点Ⅲ】 ステップアップシートを活用した学級集団としての振り返りを通し、生活の向上に向けて自主的に努力する意欲が育ったか。

感想の記述と事後アンケートによって考察を行う。

(ア) 抽出児童における考察

3時目の学級集団としての振り返りでは、ステップアップシートを活用した。事前の実態把握と10日間の実践後にとった学校生活を振り返るアンケート(学校生活アンケート)と、学級集団アンケートの結果をグラフ化して比較し、変容に対する気付きと変容した理由を考えさせた。まず、N児は、学校生活アンケートにおいて、実践前は、時間の守り方で、下級生の手本になっていると「全く思わない」と回答していたが、実践後は「まあまあ思う」と回答している。そして、めあてを立てて実践したことで、時間を守ることに對する自分の意識が変わったことを、グラフによって視覚的に確認できていた(図6)。また、掃除の仕方については、めあてを立てていなかったため、事前では「あまり思わない」と回答していたのが、事後では「まあまあ思う」と回答し、実践前より下級生の手本となる姿を意識していたことも分かる。その理由として、掃除を静かにし隊の取り組みで、学級全体に声を掛けて帰りの会で確認してきたことが、意識の変化へつながったと考えられる。

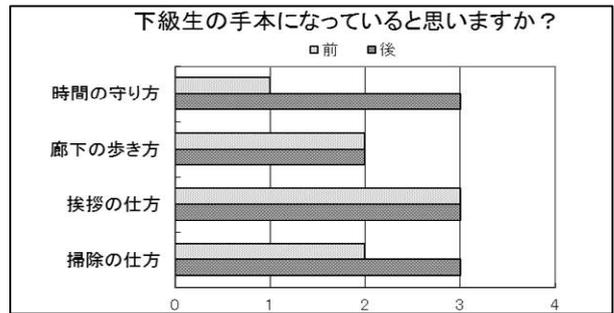


図6 N児の学校生活アンケートの結果(1月実施)

次に、学校生活を振り返るアンケートの学級全体の結果と学級集団アンケートの結果を実践前と比較した。学校生活アンケートでは、時間、廊下、挨拶、掃除のどの項目も事前より意識した生活ができていることが分かる(図7)。実際には、1つの項目に絞ってめあてを立てたが、それぞれが頑張っている姿は、生活態度全般において、学級全体が下級生の手本となる姿につながっていると考える。学級集団アンケートにおいても、「目標をやりとげる」「決まりを守る」「認め合う」「話をつなげる」の項目において変容が見られ、学級集団力の伸びを確認した(図8)。そして、グループで2つのアンケートの結果の変容に対する気付きとその理由について話し合ったところ、N児のグループの話合いシートには、全体的に前よりよくなってきていることに対する理由として、みんながちゃんと意識できていたから、また、一人一人が意識して手本になれるまで頑張ったからと書かれていた(資料12)。このことからみんなの頑張りにも気付いていることが分かる。そして、グループでの話合いを基に学級全体での話合いへと広げていった。

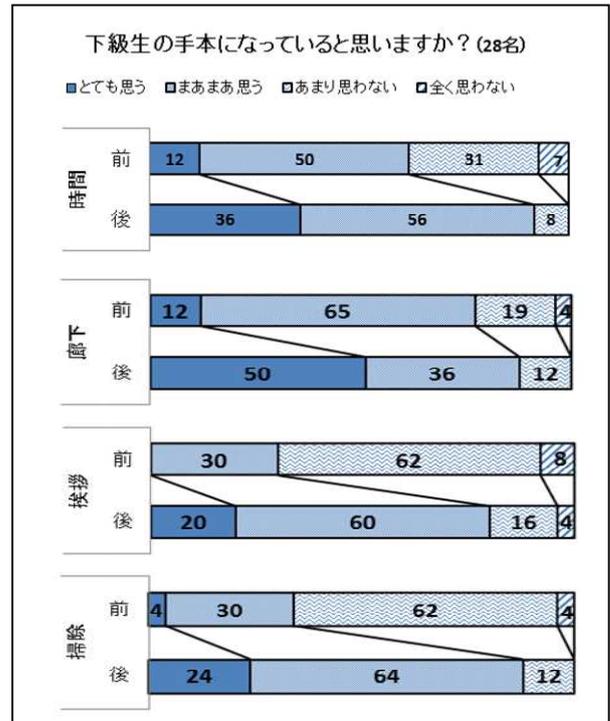


図7 学校生活アンケートの学級全体の結果(1月実施)

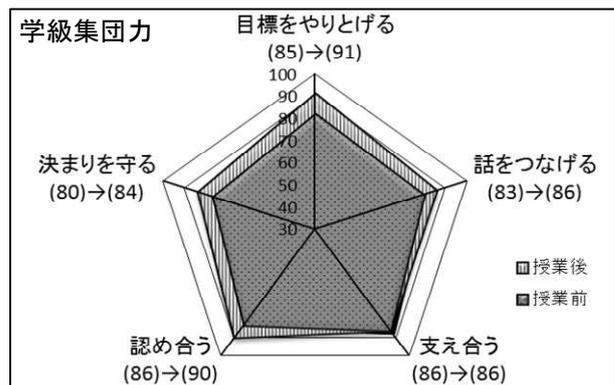


図8 学級集団アンケートの結果(1月実施)

気付き 理由
前よりよくなって みんなちゃんと意識ができていたから
全体的にとっても思っ 一人一人が意識して手本になれるまで頑張ったから

資料12 N児のグループの話合いシート

実感している。このことから、N児は所属感を得ていることが分かる。そして、自分の頑張りやクラスみんなの頑張りを確認したことが、これからの生活の向上へ向けての意欲につながっていることも分かる(資料13)。授業の終末には、目指す6年生像について「どんなことにおいても下級生の手本になり、全校を引っ張る6年生になりたい」と短冊に書いて、これからの生活向上に対する意気込みを発表した。

自分がこの活動に意識して取りくんだ。クラスみんなが自分だけでなく、ほかの人にも、「くした良くなよ」など教えてくれたから良くなったのでこのまま進んでみんなでしっかりした6年生になていきたい

資料13 N児の感想

(イ) 学級全体における考察

学級集団としての振り返り後、ステップアップシートに書かれた感想に、学校生活アンケートの学級全体や学級集団アンケートの結果がよくなったのは、「自分自身がめあてを意識して頑張ってきたから」と書かれ、自分の頑張りが学級集団力の伸びにつながったと感じ、所属感を得たことが直に読み取れるが、そう書いていた児童は、57%(16名)にとどまった。しかし、実際は、28名全員が、自分も含めた「みんな」や「一人一人」が、目標に向かって努力してきたと感じており、所属感を得ていると考える。そして、全員が「問題があったら解決していきたい」「めあてを意識して頑張りたい」など書いており、これからの生活向上に対する意欲をもっていることが分かる(表3)。

表3 学級集団としての振り返り後の感想

振り返り後の感想に書かれた言葉	延べ人数
みんなが・一人一人が頑張った	28人
解決していく、頑張っていく(これからの意欲)	28人
目標に向かって努力(目標を意識した)	23人
自分も(自分が)意識した取組をした(頑張った)	16人
アドバイス・教える・声をかける・励ます	14人
協力し合った・助け合った	10人



図9 これからへ向けての意気込

3時目の終末に、目指す6年生像についてそれぞれが短冊に書いて発表をした後、グループのメンバーと掛け声を掛け合い、これからへの意気込みが感じられる様子も見られた(図9)。

オ 授業後のアンケートからの考察

実践を含んだ3時間の授業後に行ったアンケート「目指す6年生像に近づき隊大作戦を通して、自分自身に対する気づきがありましたか?」の問いに、96%(27名)の児童が「ある」と答えた。その気づきとして、「めあてに向かって頑張ることができる」「友達のよいところを見つけることができる」「頑張るめあてを決めることができる」「友達にアドバイスできる」「友達のアドバイスを聞くことができる(素直)」などを書いていた(表4)。このことから、アドバイス、賞賛、励ましをし合う交流活動を通して、めあてへ向かって実践したことで、自分のよさに気づき、自己肯定感を得ていることが分かる。また、「学級における問題は、みんなで話し合って解決できる」に、96%(27名)の児童が「とても思う」と回答し、問題解決への自信をもっていることが分かる(図10)。その理由として、自分自身が頑張ったという達成感とも

表4 自分自身に対する気づき(1月実施)

振り返り後の感想に書かれた言葉	延べ人数
めあてに向かって頑張ることができる	14人
友達の頑張り(よいところ)を見付けることができる	8人
頑張るめあてを決めることができる	4人
友達にアドバイスできる	4人
友達のアドバイスをきくことができる(素直)	1人

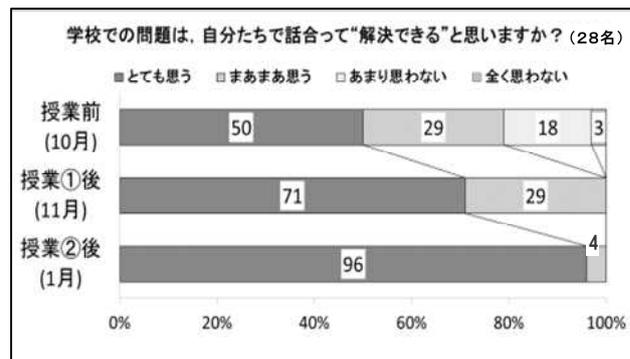


図10 問題解決への自信の変容

表5 「解決できる」と答える理由

解決できると思う理由	延べ人数
みんなで一緒に解決してきたから	15人
自分で決めためあてに取り組むことができたから	10人
アンケートの結果がよくなってきたから	4人
みんなで話し合ったから	4人
グループやペアタイムで励ましたから	3人

に、友達と一緒に解決してきたこと、友達の励ましがあつたから、友達がいたからこそできたということを実感し、それが自信へとつながったことが分かる。(表5)。また、この自信が「学校での問題は解決していこう」という、生活における課題解決へ向けた更なる意欲の向上につながったと考える(図11)。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

- ・ 学級全体とグループでの交流活動によって、自分の考えを広げたり、深めたりすることができ、取り組む姿がイメージできる具体的なめあての自己決定ができた。そして、具体的なめあてができたことで満足感を得て、自己決定しためあてをみんなに褒められたことで実践意欲をもつことができ、自主的に努力する実践態度の育成につながった。
- ・ 実践における振り返りにおいて、具体的なアドバイス、賞賛をし合いながら相互評価をしていくことにより、客観的に自分の実践態度を振り返ることができた。そして、励まし合うことにより実践意欲が喚起され、自主的に努力する実践態度の育成につながった。また、アドバイス、賞賛、励ましを続けてきたことで、自分のよさに気づき、自己肯定感を得ることもできた。
- ・ 自分自身と集団の変容を視覚的に見取することで、自分の頑張りが集団としての高まり、学級集団力の伸びにつながったことを実感し、所属感を得ることができた。また、学級の一人一人の頑張りに気付くことができ、友達がいたからこそ頑張れるということを実感したことで、学級や学校生活における問題解決への自信をもち、これからの生活の向上へ向けた意欲へとつながった。

(2) 今後の課題

- ・ 学級や学校における生活上の問題を児童自身が見付け、解決していく指導の工夫。
- ・ 活動の成果が得られない場合でも、努力してきた過程に価値を見い出させ、次の取組につなげていく指導の工夫。

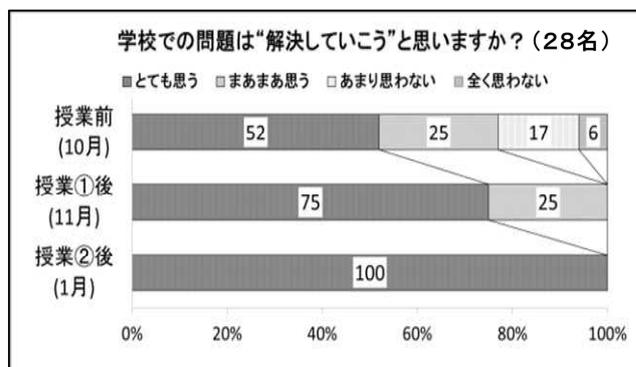


図11 問題解決への意欲

《引用文献》

- 1) 片岡徳雄 『特別活動論』 1996年2月 福村出版 p.109
- 2) 中川昭則 『特別活動の特質と指導』 1996年12月 文溪 p.199 p.200
- 3) 杉田 洋 『よりよい人間関係を築く特別活動』 2011年8月 図書文化 p.22
- 4) 杉田 洋 『特別活動で子どもが変わる!』 2011年11月 小学館 p.9
- 5) 國分康孝 『カウンセリングを生かした授業づくり』 1998年6月 学事出版 p.51
- 6) 國分康孝 『授業に生かす育てるカウンセリング』 1998年5月 図書文化 p.156

《参考文献》

- ・ 新潟大学教育学部附属新潟小学校 『学級力で変わる子どもと授業』 2010年2月 明治図書
- ・ 杉田 洋 『よりよい人間関係を築く特別活動』 2011年8月 図書文化